知礼の『妙宗鈔』における約心観仏と即心念仏

張 成 林

四明知礼（九六〇～〇八）は『観経疏妙宗鈔』において、天台宗観の原理を観経に適用し、観経の十六観法はすべて一念三観をもって密三論を照らすものと解釈した。しかし観経の観法と般舟三味における一心三観は、直接自己の一念を観して本性仏を顕す一行三味等の通途の観心法門とは違ったかたちが観て、専ら西方の弥陀仏正の境を観し、これに託して心性本具の弥陀依正を顕す円妙経経の観であると説いた。従って彼は観経の経題における観仏と天台観経疏に説く「観心為宗」という異なる観を解釈することによって、両者を会通、観仏と心観とは相違するものではないと主張し、約心観仏と即心念仏と称した。この二語は知礼の観仏思想の特色を端的に表現した言葉といえるが、彼はなぜ「約心観仏＝即心念仏」という異なる表現を用いたのか。本稿では「約心観仏＝即心念仏」という異同について検討してみたい。

知礼は円教の初心行者の立場で、観経の観法は所観の境を心仏衆生三無差別、観心則易、今此観法非但観仏、乃即心観仏を心仏衆生三無差別、観心則易、今此観法非但観仏、乃即心観仏と称するが、知礼は観経の観法の難易を論ずれば易易に従うべきとし、『法華玄義』の三法無差、観心則易の説に基づき、観経の観法は心法の易仏性に従うべきと主張する。つまり観経の観法はただ仏を観するのではなく、心性に囲って観するのであるから、凡下の心に就いて高聖の仏が顕れ仏観を修するけれども難行ではない。ここで観心観の観字には心仏衆生の
三法の中でいずれに読って観するべきなのか、という意味が
あると思う。因みに「摘波心性、観彼依正、依正可リ」と
依正、観於心性、心性易発（大正三七・九五中）という文
も心法の易修性に従って述べたものといえる。従って観縁の
観仏を「観心観仏」と呼んでも差支えないとだろう。更に知礼は心法の
近要義によって約心観法論を展開する。

以切法を変造し、一切法を性具するとは、弥陀依正も心性の
所具所造であって、心外の法ではないと示した。しかも一能
造因縁及所造法、皆悉当処全是心性。一日正三七・九五中
とあって、一切法（弥陀依正）は当相当処において全くわかる
心性そのものであるという。よって能観も己心であり、所観
己心を観するけれども、心外の弥陀依正を観するのではない。
だから再度「三無差別、観心則易」の説に基づき、観心の
心を観するけれども、心外の弥陀依正を観するのでは
ない。弥陀依正の境も己心（心性絶待）となるのである。つまり
心を著法の総として観縁を立てるのであるかという質問に、知
礼は心法が「近要復要」であるからと説明する。つまり諸法
皆総（指要録）に謂く、であるけれども、心法の近要性に従っ
て心（念心、己心）を諸法の総として観縁を立てるのであるとい
うのであるという。心法の近要について彼は二つの義によって
説明する。①心法は能造であるから、性具の義が容易に顕れ
容易に能所分別の念を超えることができる。
なお知礼は「妙宗録」においてわが心性は法界に周遍し、
観礼の「妙宗録」における約心観仏と即心仏（張）

一八四）は約心の「約」の意は依・拠・就・従等の義に通
じると摘発している（天台宗全書二二下）。筆者はこの文
に更に以の義、取の義に通じると思う。ともあれ約心観仏の

—787—
知礼は「妙宝鈎」における約心観仏と即心念仏（図）

約心観仏はマン陀羅に於て約心の為に仏を観するものである。
即心念仏は約心観仏を約心の為に心を念べるものである。

約心観仏は、約心と即心念仏の二つがあり、約心観仏は約心の為に心を念べるものである。即心念仏は、約心の為に心を念べるものである。
心仏一体を説いて観仏はそのまま観心であると断言した。
つまり知礼は心性本具の理に基づいて心仏一体を説き、所観
の弥陀依正は心性を離れたものではないと主張した。なお知
礼は「具体不二、方名為即」（大正三二・〇二下）と述べ、
一体不二であるか「即」と名づけられるのであるとした。
従って即心念仏の「即」は心仏不二（心仏一体）の義であると
心性本具の理である。
心仏不二というのである。つまり外境たる所観の弥陀依正は
心性本具の法である外観の法ではないということから、心
仏不二というのである。
心仏不二を意味し、しかも心仏不二という場合には自性と心性本具
の義と託隠観の義が含まれていると考えられる。そして
約心念仏に「即心観仏、託隠観性」（大正三〇・〇三中）と
あるように、即心観仏に託仏の義があるので、即心観仏も
約心観仏と同じく観心に相当するのである。
なお、知礼は「今之妙観、即於染心観心四净土、（大正
三七・九六中）と述べ、観経の妙観は染心に即して四淨土を
観するのであるという。よって、即心の「心」は染心（顕心
妄心）であることが知られる。また、「妙宗鉱」の内容によ
る限り即心念仏の「念」は主に観心の念を指すのであって、
称念の念の意は稀薄であると思われる。
以上本稿では、約心観仏と即心念仏との異同につ
いて考察して行った。その結果、約心観仏と即心念仏は、
知礼の「妙宗鉱」における約心観仏と即心念仏（張）